
夢の世界

ねこのしっぽ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢の世界

【著者名】

ねこのじつぽ

【あらすじ】

中学3年生、秋。友達、親、教師。世の中は私をいらだたせる物ばかり。近頃私は、学校では友達と教師に追い詰められ、家では親に怒られ、私が休まる所といえば、ベッドの中だけ。布団にはいつて目を閉じると、いろんなことを考えてしまつ。その中でも最近よく考えるのは受験の事。受験を、投げ出そうかなーということ。クラスで進路希望が決まってないのは私だけ。あー、もう考えるのやめよう。私は目をつぶつた。そして、夢の世界へ

中学3年生、秋。

「ねえねえ、佳歩。佳歩はどこで高校行くの？」

「佳歩、あんたもう中3の秋よ？いいかげん志望校決めなさい。」

「釘固め、希望書出してないの前だけだぞ。」

友達、親、教師。世の中は私をいらだたせる物ばかり。

近頃私は、学校では友達と教師に追い詰められ、家では親に怒られ、私が休まる所といえば、ベッドの中だけ。となると、できるだけ逃げたい私の睡眠時間は長くなつて、もしかりん勉強時間が減る。受験生なのに。

とか思いながらも、私は今日も8時に布団に入った。起きていると親もうるさこけど、寝ちゃえば何も言われないしね、こっちのもんだ。

布団にはいつて口を閉じると、いろんなことを考えてしまう。その中でも最近よく考えるのは受験の事。

受験を、投げ出しちゃかなーということ。

クラスで進路希望が決まってないのは私だけ。

決まってるみんなは気楽そうなもんだ。

受験なんてしなければ、進路希望なんて決めなくていい。

でも、高校に行かずにコレをやりたい…っていうものがあるわけでもないし……。

それに、受験が面倒くさいってだけで高校に行かないのもかつこ悪いよね。

…あー、もう考えるのやめよつ。
私は目をつぶつた。
すぐに眠りに落ちた。

目を開けると、そこは真っ暗な世界だった。

光がない、真っ暗な世界。見えるのは自分の体だけ。足元さえもわからぬ。

それには何より、音が全くない。自分の心臓の音さえも聴こえない。

これは…夢の中?

そう思つた瞬間、暗闇の中に何かが現れた。

人だ。

その人…男の人の姿は、暗闇の中でただ一人、光つて見えた。

そして、その男の人の目は、確かに私を見ていた。

「こんにちは、はじめまして、佳歩。」

その男の人はスラッシュした体つき、キリッとした顔つきで、スースを着ていた。

そして、その姿にピッタリの、まるで漫画の中の王子様のようになってしまった。

私に手を差し伸べた。

「え、あの、誰ですか？何で私の名前知ってるんですか？」

「これは失礼。私はレイ。夢の世界の住人。」

レイは私にほほえんだ。

その笑顔に私は不覚にもドキッとしてしまい、恥ずかしくなつて顔を背けた。

「どうひで佳歩。瓶はどうしてこの世界に来たんだい？」

私はレイの方を見た。

「何をしこ…？そんなの、私、気がついたらここにいたんだよ。目的なんてないよ。」

「いや、君は目的…理由を持っているはずだよ。

この世界には理由を持つていないと入れないから。佳歩、手を開いていらっしゃ。君の心は行き先を決めていらっしゃるはずだよ。

「

私はレイに言われるまま手を開いた。

手には小さな紙、切符のようなものが乗っていた。

「何だね？…これ。」

こんなもの、持っていた覚えはない。私は再びレイの方を見た。

レイはこうつとほほえんでいた。

「行き先を見てください。」

私はレイを少し不信そうに見て、切符に目を落とした。

「口口町……」

「おや、ようによつてそんな街外れの田舎を選ぶとは……。
でも、佳歩が選んだ場所なら、仕方ありません。では行きましょ
うか、口口町へ。」

レイは私に手を差し伸べた。私はレイの手を握った。

すると、それまで真っ暗だった世界が、真っ白になつた。
まぶしくて、一瞬目をつぶつて、目を開けると、住宅街にいた。

「あれつ、……知つてゐる。」

この住宅街は私の家の近くにある、クラスメイトの大半が住んでい
るところの住宅街だ。

「おや、そうですか。ではもう一歩踏み込みましょつか。目をつぶ
つてください。」

私は目をつぶつた。

不思議だった。

夢の中なのに、秋の冷たい風が体に当たるみたいな感覚がある。
それにレイとつないでいる右手が…あつたかい。

しばりくわると、ヒジからか声が聞こえてきた。

「私…本当に、IJKの学校に行きたいのかなあ。

勢いだけで決めたけど、本当に私に合ってるのかな。」

「俺、ずっとこんな勉強して意味あるのか?

もつと本当にやりたいことがあるんじゃないのか?」

「あたし、ずっとこの高校一本で決めてたけど、高校出た後何したいんだろ?」

「進路希望も適当に決めだし、夢もないし。IJKからびりくわい…

「友達に勧められた高校に決めちゃつたけど、行つたら私はびりくわるの?」

IJKの声…聞いたことある。クラスメイトの…みんなの声?

私は目を開けた。レイが私のほうを見つめていた。

「分かった。私、バカだったんだ。不安なのは私だけ、って思い込んで、悩んで。

みんな一緒になのにな。」

レイは私にほほえんだ。

そして一言、「もう大丈夫ですね。」とつぶやいた。

「レイ、私ね……」

レイは静かに私の口をふさいだ。

「佳歩、もう朝です。佳歩は目覚める時間です。

君はもう答えを見つけた。この世界にいる必要はない。」

レイは、私に、にっこりとほほえんだ。

私は返事の代わりに、レイにほほえみ返した。

目が覚めると、自分の部屋に戻っていた。

「あれ、今の……夢……」

あれは確かに、夢……だったんだよね。

でも妙にリアルだったな……。

私は手を開いた。手には小さな紙、切符があった。その切符にはこう書いてあつた。

今
未来

(後書き)

作・春日ハル

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1460e/>

夢の世界

2011年1月26日02時01分発行